
俺と幼馴染とバカたちと！

FORCE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼馴染とバカたちと！

【Nコード】

N8958X

【作者名】

FORCE

【あらすじ】

試験召喚システムがある学園に入学した「荒井圭太」
幼馴染たちといっしょにバカやって行きます！！

プロローグ(前書き)

詰めて書き込みますがお願いします。

プロローグ

「クラス振り分け試験」当日

圭太サイド

圭太「よし、明久、小手調べでもするか！」

吉井「何でも来い！」

圭太「三権分立とは「司法」と「立法」ともうひとつは何でなりたっている？」

さすがに分かるだろう？幼馴染である雄二に確認してみるか！

圭太（雄二、明久はこの問題分かるかな？）

雄二（うーん、分からん）

圭太（正解率は何割ぐらい？）

雄二（半々つというぐらいだな）

まあそんなぐらいかな？

圭太「ほら、明久もうひとつは何で成り立っている？」

明久「あまり僕を見くびらないでくれよ圭太・・・二つまで絞れるよ」

圭太・雄二「ほう」

明久「「憲法」か「漢方」のどっちかだったはず・・・」

圭太・雄二「「行政だ（だよ）」

そこにある生徒が割り込む

島田「ウチからも・・・では基礎問題！「 CH_3COOH 」とは何でしょう？」

明久「・・・（ぷいつ）」

明久？どうした顔なんかそむけて？

島田「吉井？」

明久「・・・英語は苦手なんだ」

はいそうですか・・・ってはいいいいい？

島田「え？・・・これって化学だけ・・・」

「

明久「じゃあ僕こっちの教室だから！」

「……」

明久はF決定ですか……

圭太「雄二！Fクラス代表になるならちゃんとしてくれよ？」

雄二「まあ大丈夫だろう」

圭太「俺は明久と一緒にの教室だから先に行くぞ！」

雄二「約束果たしてくれよ？」

圭太「お前こそ」

つと言つて雄二たちと離れる

教師「では、振り分け試験始め！」

これが振り分け試験か楽勝だな……

と言いたいところだが雄二の約束を果たさなくては！

圭太（……ん？姫路の様子がおかしい？）

バタツ

明久「姫路さん?!」

教師「姫路、途中退席は無得点扱いとなるが」

つあやべ〜ねむい……

そう思うと意識がなくなっていた。

圭太「っは！ヤバイ遅れる〜」

現在、学園へ全力ダッシュ！

あつ！学園が見えてきて

????「荒井、遅刻だぞ」

学園に入る一歩前で呼び止められた。

????「荒井！聞こえとらんのか？」

圭太「聞こえてますって西村先生！あと遅れてすみませー」こら、

吉井!」?

明久「あ、鉄じ・じゃなくて、西村先生おはようございます。」

西村「今、鉄人って言わなかったか？」

圭太「いいじゃないですか」

明久「そうだよ - 「黙れ」ひどいよ！」

西村「まあいい、ほら受け取れ」

そいつって振り分け試験の結果が渡される。

圭太「明久、聞いておくけど自信は？」

明久「Cクラスには行けそうd - 「無理！」ってひどいよ！」

といって俺は結果を見ておく見ても変わりは無いらな。

荒井圭太・・・Fクラス

明久「んなバカなああああ！」

明久も現実を見たことだし、連れて行くか・・・

明久「ねえ圭太、」

圭太「ん？」

明久「どうして学園にホテル並みの教室が・・・」

圭太「スポンサーってすごいね！」

明久「あつ僕の貴重なカロリーが！」

早く連れて行こう、こうなると邪魔になってしまっ

圭太「明久行くぞ！」

俺たちは目的のFクラスに到着した。

明久「なんだこの廃墟は・・・」

圭太「早く入ろう明久・・・（ガラッ）すみません遅れました。」

明久「すみません ちょっと遅れました」

雄二「早く座れ、うじ虫達」

教卓に幼馴染である雄二が立っていた。

よかったよ雄二ちゃんと約束を守っていたではないかってそうじゃ
ねえ

圭太「雄二・・・ひどいよ〜」

雄二「スマン間違えた後ろのやつにいつている。あと、ありがとな
圭太！」

圭太「気にすんな」

明久「・・・雄二、なにやってんの？」

雄二「見て分からんか？俺はクラスの代表だ！」

明久「えっ？このバカが代表？」

圭太「雄二、俺の席は？」

雄二「適当でいい」

なんとという教室だ・・・なんて自由なんだ！

さあ〜てどこに座るかな？

???「圭太ではないか！」

圭太「ん？ああ秀吉か」

そこには、近所に住んでいる秀吉が座っていた。

雄二とは小学校で知り合った仲だ

秀吉「なぜ、振り分け試験近くになると家にはいないのじゃ？」

圭太「Fクラス代表の家に泊まっていたからな」

まあ振り分け試験が近くなると何か言われそうだからな

秀吉「ふ〜ん、そうなのかの？けど一緒になれてうれしいのじゃ！」

つとになると・・・ヤバイ！秀吉の姉である優子が聞いたら俺の命が

・

ん？誰か入ってきて・・・って福原先生か

福原「えーおはようございます。Fクラス担任の福原慎です。

よろしくお願いします。」

福原先生どうしたの黒板の溝なんて見て・・・ああそうかチヨーク
が無いのか

福原「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の
人からよろしくお願ひします。」

廊下側か俺は二番目か、んじゃ最初の人？

秀吉「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。その荒井圭太とは
幼馴染じゃ」

Fクラス『殺せえー！』
なぜに？まあい

圭太「久しぶりに喧嘩するねえ」

「少々お待ちください」

五分後

死体（Fクラス）がそこら辺にくたばっている

圭太「荒井圭太だ雄二とも幼馴染だあと喧嘩はあまりしたくないの
でよろしく」

喧嘩したあとだから説得力は無いだろう

他の人が復活して自己紹介を聞いていくと

俺の意識がなくなっていた。

「???」・・・き・・・じゃ、起きるのじゃ!」

誰だ俺の睡眠をとったやつは! って秀吉が

『大ありじゃあああああ』

て今度はなんだよ。

どこの合唱団だよ

雄二に確認でもするか。

圭太（雄二これってなあに?）

雄二（ああ寝てたのか?今から召喚戦争を行う）

俺が寝ていた間に引き金が引かれていた。

プロローグ（後書き）

どうも文才の無い作者のFORCEです。

いつ書けるのか分からないので詰め込みました。

これからも「俺と幼馴染とバカたちと！」よろしくお願ひします〜
!

オリ主設定！

名前 荒井圭太 あらい けいた

年齢 17歳

身長 172cm

体重 53kg

性別 男

趣味 寝ること、読書

性格 優しい？、楽しめたらそれでいい、友達思い

容姿 中性的な顔で、黒髪に赤色の目、髪の長さは秀吉と一緒に

身体能力 雄二達より喧嘩は上の方

能力 完全記憶であり、両手でテストが受けれる。

召喚獣の設定 容姿はそのままデフォルトされていて、

腰にM92F（ベレッタ）二丁と日本刀が一本

腕輪は、まだ未定です。小説を書いていく中考えて

行きます。

オリ主設定！ (後書き)

ヒロインはどうするべきか考えています。
なにかあったらコメントでもお願いします。
というより
文才がほしい・・・

第一話 Dクラス戦 宣戦布告（前書き）

問題 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用意するべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

「問題点・・・マグネシウムに炎をかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。」

合金の例・・・ジユラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目というひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点・・・ガス代を払っていなかったこと」

教師のコメント

そこは問題ではありません。

吉井明久の答え

「合金の例・・・未来合金（すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いと言われましても。

荒井圭太の答え

「問題点 火力が低いためおもしろ反応が見れない、そのためマグネシウムと酸素の化合を激しくするためには、マグネシウムが酸素とちゃんと化合できるように満遍なく潰す。」

教師のコメント

激しくしないでください。迷惑です。

第一話 Dクラス戦 宣戦布告

F 『勝てるわけがない』

F 『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

F 『姫路さんがいたら何もいらぬ』

姫路さんのラブコールが飛んでるけど？

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

おおさすが雄二へこたれないね

F 『何を馬鹿なことを』

F 『できるわけないだろう』

F 『何の根拠があつてそんなことを』

さすがに常識はありますね。Fクラスで・・・

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。

それを今から説明してやる」

雄二「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカート覗いてないで前に来い」

さすがは康太ムツリだな

康太「……………（ブンブン）」

姫路「は、はわっ」

雄二「土屋康太。こいつがああ有名な、寡黙なる性職者ムツリーニだ」

康太「……………！！（ブンブン）」

F 『ムツツリーニだと……………？』

F 『馬鹿な、ヤツがそつだといふのか……………？』

F 『だが見る。あそこまで覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ……………』

F 『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

康太、今否定しても無駄だ

雄二「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力は

よく知っているはずだ」

姫路「わ、私ですかっ？」

雄二「ああ。うちの主戦力の一人だ。期待してる」

F「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだっただ」

F「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

F「ああ。彼女さえいれば何もいらさない」

雄二「木下秀吉だっている」

F「おお……！」

F「ああ。アイツ確か、木下優子の……」

雄二「当然俺も全力を尽くす」

F「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

F「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

F「実質、Aクラスレベルが二人もいるのか！」

雄二も人気がないか！

雄二「それに、吉井明久だっている」

……シン

明久「ちよつと雄二！ 僕の名前を呼ぶ必要あった！？ ていうか完全にオチ扱いだよな！」

雄二「ちなみにこいつは《観察処分者》だ」

明久「ああーもう、折角上がった士気が凄い勢いで直下下降してくっ！」

さすが明久^{オチ}w

けど士気はどうやって持ち直す？

雄二「それに……」

それに？

雄二「荒井圭太だっている」

F「木下姉妹の幼馴染か」

F「さっきの異端者じゃないか！」

F『・・・殺したいほど妬ましい』

最後のは康太力ナ?

雄二「ほら圭太さつさと前に来い!」

圭太「はあゝい」

と言つて前に行く。

雄二「こいつは、Fクラスの切り札だ!」

圭太「?」

雄二「圭太は、Aクラスの学年主席を圧倒する実力がある」

圭太「一回だけだけど?」

雄二「圭太がFクラスに来たのは、世の中は学力だけではないことを証明するためだ!

そのことで、俺と、この圭太がいる」

約束だからね

それは守らないと

F『それならいけるかもしれない』

F『あのAクラスを圧倒する力があるなら』

雄二「皆、この境遇におおいに不満だろ?」

F『当然だ!』

ノリのいいクラス(バカ)は単純だから扱いやすいな
覚えておこう。

雄二「ならば全員筆を取れ。出陣の準備だ!」

F『おおー!』

雄二「俺達に必要なのはちゃぶ台じゃない! Aクラスのシステムでスクだ!」

F『うおおー!』

姫路「お、おおー。」

姫路もがんばつてもらわないと・・・

圭太「イテツどうしたんだ秀吉?」

秀吉「知らんのじゃ」

圭太「・・・そうか? まあいいけど、ああ秀吉! 優子はどこのクラ

スだ？」

秀吉「Aクラスじゃのう、それを聞いてどうしたのじゃ？」

圭太「・・・俺の命にかかわる・・・」

Aクラス戦までには祈りを済ませとかないとな
ばれていなければいいかな？

雄二「明久には、Dクラスへの宣戦布告の死者なってもらう。無事
大役を果たせ。」

明久「・・・下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭う
よね？しかも今字がちがく無かった？」

よく分かったね。その通りだよ！

雄二「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることは無い。騙された
と思っ行ってみる」

明久「本当に？」

雄二「本当だ、俺達を誰だと思っっている」

圭太「そうだ、俺達を信じろ。俺達は友人を騙すような真似はしな
い」

これで生贄あまひさになってくれるかなあ？

明久「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

明久はやっぱりバカだ・・・

雄二・圭太「ああ、頼んだぞ（よ）」

クラスメイトの歓声と拍手で明久を送り出した。

俺もついていきますか・・・俺も一応、騙したからな

圭太「雄二！拾ってくる」

雄二「分かった」

ん？明久が面白いようにリンチ食らってるな・・・

助けるか！

圭太「明久」

明久「あつ圭太じゃないか！さっきはよくも（バキッ）・・・」

しゃべる余裕があるならどっか逃げよ

圭太「（バキッ）明久、今日は弁当やるから見逃してくれ」

明久「分かったよ」

明久が教室に帰っていくところを見守った

Dクラスからのイロイロな視線が圭太に集まる（女子から）

圭太「（バキッ）はい、次の方〜どっからでもかかって来いやあ〜！」

数分後・・・

D「すんませんでしたあ〜」

D「調子くれてました〜」

うんFクラスより弱いね！断言できるよ！

そう思いつつDクラスを後にする・・・

ん？メールが

ああ屋上に集合か・・・

屋上に向かって歩き出した

第二話 Dクラス戦 屋上（前書き）

問題 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（２）悪いことがあった上に更に更に悪いことが起きるとえ』

姫路瑞希の答え

- 『（１）弘方も筆の誤り』 『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（１）弘方の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『（２）泣きつ面蹴ったり』

荒井圭太の答え

- 『（２）一般人には3コンボまで！』

教師のコメント

ひどすぎます。

第二話 Dクラス戦 屋上

屋上に近づくにつれて、いつものメンバーと合流する。
屋上で雲一つない空から眩しい光が差し込む。

とても気持ちがいい

明久「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

圭太「それじゃ、先にお昼ご飯ってことだね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなもの食べるよ？」

圭太「それについては、俺が分けるから関係ない」

約束だからね

姫路「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

やっぱり姫路はやさしいなあ・・・痛い！痛いから秀吉そんなにつまむな！

明久「いや、一応食べてるよ。」

圭太「彘？」

明久のせいで間違えたじゃないか！

雄二「・・・アレは食べてると言えるのか？」

けど本当にどうやって生きてきた？^{ゴキブリ}明久？

明久「人を虫扱いはひどいよ！」

圭太「本音を読むな！」

明久「つで雄二、何が言いたいのさ」

雄二「いや、お前の主食って 水と塩だろう？」

明久「失礼な。きちんと砂糖だつて食べてるさ！」

姫路「あの、吉井君？水と塩と砂糖つて、食べるとはいいいませんよ・・・」

秀吉「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

仕方ない、温かい目で見守るか

雄二「まっ、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」

圭太「俺も仕送りだけど？」

親は海外にいてあんまり帰ってこないからな・・・

明久「僕よりも仕送りが多いじゃないか！」

圭太「そうかな？三十万くらいだけど？」

姫路「…………あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

明久「え？」

よかつたじゃないか明久！女子の手作り弁当だぞ！

明久「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

姫路「はい。明日のお昼で良ければ」

雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久「うん！」

島田「…………ふーん。瑞樹って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

島田おまえは嫉妬深いんだな・・・

姫路「あ、いえ！その、皆さんにも…………」

雄二「俺達にも？いいのか？」

姫路「はい。嫌じゃなかったら」

秀吉「それは楽しみじゃのう」

康太「……………（コクコク）」

島田「…………お手並み拝見ね」

圭太「ありがと〜姫路！」

姫路「わかりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね」

明久「姫路さんって優しいね」

姫路「そ、そんな…………」

明久「今だから言うけど、僕初めて会う前から君のこと好き

」

雄二「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」

明久「 にしたいと思ってました」

明久「・・・ついにお前は変態になったんだな。」

秀吉「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

雄二「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」

明久「だって・・・お弁当が・・・」

圭太「つとということで雄二」

雄二「ん？」

圭太「明日は弁当いらないよね？」

雄二「家に泊まっているからね、」

雄二「姫路が作ってくれるんだその必要はないだろう」

明久「えっ？いつも作ってくるの？」

圭太「雄二の家に泊まっている時だけだど？」

雄二「圭太の料理は結構いけるぞ！」

明久「へえ、そうなんだ、ってそうじゃないよ圭太！弁当分けてくれるんだよね？」

圭太「もちろん」

と言つて弁当を分けてあげる

秀吉「わしにも分けてくれんかのう？ひさしぶりに食べたいのじゃ！」

圭太「ん？べつに構わないけど」

といつて秀吉にもわけける・・・康太・・・弁当がほしいのか？視線が弁当にしか、いつてないけど？

圭太「康太もたべる？」

康太「・・・(コクコク)」

康太にも分けたら・・・って俺の弁当がもう・・・無い・・・

まあいいよ、昼飯抜いたぐらいで死なないだろう明久ゴキブリがいるからな
明久「また虫扱いにしたなあ！」

圭太「だから本音を読むなっての！」

雄二「話がかかなりそれだな。さて、試召戦争の話に戻ろう」
ヤバイツそのこと忘れてた！

秀吉「雄二。一つ気になつていたんじやが、どうしてDクラスなの
じや？段階を踏んでいくのならEクラスじやろうし、勝負に出るな
らAクラスじやろう？」

姫路「そういえば、確かにそうですね」

圭太「なんだ、雄二。皆にまだ話してなかったのか？」

雄二「あまり時間が無いからな」

圭太「そうか？」

雄二「まあいい。当然考えがあつてのことだ」

姫路「どんな考えですか？」

雄二「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めないの
は簡単だ。戦うまでも無い相手だからな。」

明久「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

さすがは明久バカだな

こんどの本音はばれていないはず！！

雄二「だから、Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つ
ても意味が無いってことだ」

明久「？それならDクラスは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

俺でもそう思うよ

明久「だったら、最初っから目標のAクラスに挑もうよ」

だから明久はバカなのか・・・

圭太「さつき雄二が言つてたろ？色々と理由があるって。」

雄二「その通りだ。初陣だからな、派手にやつて今後の景気づけに
したいだろ？それに、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

姫路「あ、あの！」

ん？何かつじつまでも合わないところが？

それ位、姫路にしては珍しく大きな声を出していた。

雄二「ん？どうした姫路」

姫路「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

雄二「ああ、それが。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて」

明久「それはそうと！」

明久は意気地なしだなあ

いやっただのバカか？

明久「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」

雄二「負けるわけ無いさ」

圭太「神童ゆっじにかなう奴なんかいると思うか？」

雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

圭太「この戦いは負けられない、世の中、学力だけではないことを証明するために！」

雄二・圭太「いいか、お前ら。俺らのクラスは

最強だ。

」

みんな意見は違つけど、やることは一緒だからな

島田「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「・・・（グッ）」

姫路「が、頑張りますっ」

よしみんなはやる気だな！俺もそれに答えないとな

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

ここに、最下層が最上層に対する下克上？が始まった。

第三話 Dクラス戦 開始！（前書き）

問題 以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい。『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

荒井圭太の答え

『スペーウム光線』

教師のコメント

先生も子どものころは、流行りました。

第三話 Dクラス戦 開始!

現在Fクラスにて・・・

圭太「ねえ雄二！いつになったら殺つていいの？」

雄二「字が違うぞ！圭太は秀吉達が戻ってきたら殺つてこい」

圭太「字は間違つてないじゃないか！」

まったくこいつは、人のことだけいいやがって！

それにしても暇だ・・・あああのかは教えておかないと！

圭太「振り分け試験の結果はFクラス並みのままだけど、べつにいいのか？」

雄二「関係ない、今は、圭太の結果を見せて次のクラスには隠せるからな」

そうかならないか！

雄二「もうそろそろか・・・横溝！これを明久たちに！」

横溝「・・・！わかつた！w」

どうしたんだ横溝！急に笑つて、不気味だぞ！

F『ウオーーー』

どうした？急に士気が上がっているぞ？

圭太「雄二！なにを持って行かせたの？」

雄二「『圭太の名において逃げたら殺す』つと」

圭太「そこで俺を使うな！」

まったく油断もすきも無いな・・・

須川「坂本！吉井からの伝言だ！」

雄二「なんだ？」

須川「先生たちに偽情報をながしてくれ、と」

雄二「そうか・・・ムツッリーニ！」

康太「・・・ここに（シユタ）」

雄二「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

康太「……船越先生だ」

雄二「そうか、だったら……」

圭太「おいっ、雄二！また俺の名を使うなよ？」

雄二「わかってる、よしっ須川！これを校内放送でながせ！」

とって何か紙を渡す

俺の名は使われないよね？しかも校内放送だし

《ピンポンパンポン》

《船越先生、船越先生》

《吉井明久が体育館裏で待っています》

そういうことだったのかw

やばい腹がw……

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

明久、冥福を祈る

雄二「圭太、明久^{ゴミ}を拾いにいくぞ！」

ついにゴミになったか明久、がんばったじゃないか！

明久を助けるために……いろんな意味で

戦場にて

雄二「明久、持ちこたえろ！」

D『援軍だ！合流される前に一気に潰せ！』

D『代表もいるぞ！代表の首も取れ！』

雄二はここでも人気だな〜って今はそうじゃないかな？

圭太「明久！今行くぞ！試験召喚獣^{サモン}！！試験召喚^{サモン}」

こうして俺の召喚獣が召喚されて

『ええええええええ！』
こつちが『ええええええええ』だよ

俺が

召喚獣になるなんて！！聞いてないよ（泣）

ん？どうしたみんな口があんぐり状態になってるぞ！

雄二「圭太？お前はプログラムを壊したか？」

圭太『しないよ！逆にこつちが聞きたいよ』

くそつこうなれば！

圭太『西村先生これはどういうこと？』

西村「荒井おまえは実験体だ」

圭太『マジかよ！と言うより俺が実験体？あとフィードバックは？』

西村「もちろん付いてくる」

圭太『そですか・・・』

まあいい、その方が召喚獣とやり合いやすいし

フィードバックは付くらいけど

まずは、そこにいる召喚獣からつと

Fクラス 荒井圭太 vs Dクラス 6人

物理 78点 平均 57点

物理で殺り合ってたか

このぐらいの点数でいけるか？

にしても相手は動かないな？

切りかかったら動くかな？

圭太が日本刀で切りかかる

ザシュツ

あれっ？

やっぱり動いてないけど

圭太『雄二！みんな動いてないけど？』

雄二「当たり前前だ！お前が召喚獣になってるからな！」

そういうものなのか？

あっ！やっと動いてくれた！

Dクラス『召喚獣だろうが相手は一人だ潰せ！』

あいつが司令官か？

圭太『かかって来いや！』

この点数でいけるかな？

とびかかってきた召喚獣一（2体）をM92Fで打ち落とす。

いいねえ〜この視線で拳銃とは！あとで学園長にお話があったんだけど無しにするか！

切りかかってきた召喚獣（3体）をまとめて日本刀できり落とす

あいての防具はもろいな（俺の防具 制服）つま俺が言えるほどではないけど・・・（泣）

これならまだいけるな！

圭太『雄二！この前線を俺が保つ！その他は一旦退却だ！』

雄二「任せた！」

雄二たちは明久たちを拾って帰っていく
いつまでこらえていれるかな？

雄二「圭太！」

あっ雄二じゃないか！姫路まで？

ああそういうことか今使えるのは・・・

圭太『明久！一気にいくぞ！』

明久「分かってるよ！試獣^{サモン}召喚！」

Fクラス吉井明久

物理 32点

どうしようもないな・・・

圭太『明久！近衛部隊に宣誓布告だ！』

明久「吉井明久！近衛部隊に宣戦布告をします！」

よし！あとは姫路が仕留めるだけか

明久「姫路さん、そっちはよろしくね」

平賀「は？」

いやいや、何を言ってるんだこのバカはみたいな顔されても・・・

姫路「あ、あの・・・」

平賀「え？あ、姫路さん。どうしたの？Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

姫路「いえ、そうじゃなくて・・・Fクラス姫路瑞樹です。

Dクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます。」

平賀「・・・はあ。どうも」

姫路「あの、えっと・・・さ、サモンです」

Fクラス 姫路瑞樹 vs Dクラス 平賀源二

現代国語 339点 129点

「え？あ、あれ？」

「じ、ごめんなさいっ」

さすがは姫路！反撃無しで殺すとは

こうしてDクラス戦はたったの一撃で終わった。

第三話 Dクラス戦 開始！（後書き）

圭太「明久！」

明久「ん？なに？」

圭太「フィードバックってきついんだな」

明久「わかってくれるかい？」

圭太「もちろんだ！」

ココには絆？が結ばれていた！

第四話 Dクラス戦 終結！（前書き）

すみませんが問題は無しで・・・

第四話 Dクラス戦 終結!

Dクラス代表 平賀源二 討死

F 『うおおーっ!』

F クラスの勝鬨が校内にこだました。

F 『凄えよ!本当にDクラスに勝てるなんて!』

F 『これで畳や卓袱台ともおさらばだな!』

F 『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな!』

F 『坂本雄二サマサマだな!』

F 『荒井圭太は軍神だ!』

F 『姫路さん愛してます!』

俺が軍神だなんて

照れるじゃねーかコノヤロウ

F 『坂本!握手してくれ!』

F 『俺も!』

雄二が照れてる

はっ!雄二はツンデレか?気持ち悪い・・・

秀吉「わしは圭太と握手したいのう」

秀吉、雄二がここまでやってたんだから雄二に求めてみては?

そう思っている

明久「雄二!」

雄二「ん?明久か」

雄二が振り向くとそこには包丁を握りしめた明久が颯爽と駆け寄って、

って包丁?ペンチを持ってこなくては!

明久「僕も雄二と握手を!」

明久が雄二に包丁を突き立てようとした時

ガシッ（雄二が明久の手首を抑え）

グリッ（明久の手首をねじる）

カランカランッ（包丁が落ちる音）

雄二「……………」

明久「……………」

沈黙に耐えきれず俺は

圭太「おい！雄二！ペンチだ！」

シュ（ペンチを投げる音）

パシッ（雄二がソレをつかむ）

明久「！？す、ストップ！僕が悪かった」

雄二・圭太「……………」

生爪……………」

っはそれどころではない！

圭太「雄二早く帰ろう？」

雄二「ちよつと待て！代表と話がある」

早くしないと！俺の命が……………」（ガシッ）ほらキタア〜

秀吉「今日は一緒に帰れるかのう？」

圭太「そんなことして優子がきたらクラスのことを聞かれて折檻されるのがオチじゃねえか！」

メシ！メシッ（掴まれているところの悲鳴）

圭太「雄二！早くしろ！命がおれの命が・・・」

雄二「今、終わったところだ」

雄二も終わったことだし早く秀吉の手を・・・

そうして逃走劇が始まった・・・

雄二の家にて

圭太「危なかつた〜」

秀吉たちは雄二の家を知らないはず・・・

雄二「ああそうだ圭太」

圭太「なに？」

雄二「秀吉たちにここを覚えておいたからなw」

圭太「こんのバカアアア！」

ピンポーン

地獄の鐘インターホンがなる

雄二「ちよつと出てきてくれないか？」

くそっ仕方が無い腹をくくるしかないか・・・（泣）

ガチャ（ドアを開ける音）

そこには優子と秀吉がいた

そのあとの記憶が無く

雄二の家に居たはずの俺が自分の家においてベットで寝ていた

（by 圭太 談）

第五話 屋上

現在 圭太の家にて・・・

目覚まし時計の音から圭太の朝は始まる。

ハッ！なんだもう朝か・・・

というより、なぜに木下姉弟？が家にいるのか？

秀吉「おはようじゃ圭太！」

優子「おはよう、圭太！」

圭太「なんで俺の家に居るんだ？」

優子「抵抗するからじゃない！」

圭太「俺がFクラスにいくとお前が折檻・・・じゃなくてお話になるじゃないか！」

優子「当たり前でしょ！それとも私といることが嫌なわけ？」

ヤバイ・・・ここで選択を間違えたら

・・・殺される！

圭太「いや！そういうことではない、ただ俺は世の中は学力だけではないことを証明するために

Fクラスに行ったんだ・・・じゃなくて行きました優子様」

このジャンピング土下座でこの口調なら許される？

ガシッ（優子が間接を握る音）

優子「それほど行きたくなかったんだ」

優子さん？殺気がとてつもなく痛いんですけどおおおおおおおそのまま間接が逝ってしまった。

そして、今は、Fクラスに至る

圭太「雄二！おはよう（昨日はよくも！）」

雄二「ああ圭太かおはよう（仕方が無かったんだ）」

圭太「（今回は許してやる）」

雄二「（すまない）」

圭太「つで何で今頃勉強だなんてしてんの？」

雄二「回復試験だからな」

圭太「えっ今日なの？」

秀吉「そのことも知らなかったのかのう？」

あたりまえだ！秀吉たちのせいだ！

まあやつと実力が出せる・・・

ん？誰か来た

明久「おはよう圭太」

圭太「おはようバカ久」

明久「いきなり罵倒?!」

一日一回はこういうことを言わないと・・・ね？

雄二「おう！明久おはよう！」

明久「雄二にしたつもりは無いんだけど・・・」

雄二「なんだと！やるか明久^{バカ}！」

明久「こつちのセリフだ！このゴリラ!!」

雄二・明久「なんだとゴリア」

この中に入りたくないな〜

いまから勉強でもするか・・・

圭太「ああ〜疲れた〜」

久しぶりに本気で解いたよ〜

秀吉「うむ。疲れたのう」

康太「・・・（コクコク）」

だよねえ〜疲れるよねえ〜

ええ〜と今は昼だから屋上でも行きますか。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日ラーメンとカツ井と妙飯とカレーにすっかな」

炭水化物ばっかだなそれでよく太らないことで

姫路「あ、あの。皆さん……………」

姫路さんどつたの？ つつみ？

ああ弁当ですか

姫路「あ、いえ。え、えつと…………、お、お昼なんですけど、その、

昨日の約束の……………」

秀吉「おお、もしか弁当かの？」

姫路「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

明久「迷惑なもんか！ ね、圭太！ 雄二！」

雄二「ああ、そうだな。ありがたい」

姫路「そうですか？ 良かったあ〜」

そのときはまだ誰も知らなかった・・・あんな伏兵がいるだなんて

現在屋上にて

秀吉「天気が良くてなによりじゃ」

姫路「あ、シートもあるんですよ」

明久「気持ちいいね！」

康太「……………（コクリ）」

ああ、平和だなあ。

姫路「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

姫路が重箱を取り出し、その中身に圧倒される。

『おおっ！』

みんなが歓声を上げる。

明久「それじゃ、雄二には悪いけど、先に」

圭太「さすがにフライングはちょっと・・・」

康太「・・・(ヒョイ)」

明久「なっ！ムツツリーニ！」

康太！エビフライを一気に口に入れては

バタン

ガタガタガタガタ

顔面から地面に豪快に倒れた。

「……………」

なんだ何がおきた？

姫路「わわっ！土屋君！？」

康太「・・・(ムクリ)」

康太は起き上がり、

康太「・・・(グッ)」

姫路に向かって親指を立てた。∴足は尋常じゃないぐらいガクガクしてるけど？

姫路「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

天然だここに天然がいる！

姫路「良かったらどんどん食べてくださいね」

ん？明久たちからアイコンタクトで通信を受信した。

明久「・・・さっきのどう思う？」

秀吉（演技には見えんのう）

圭太（当たり前だろ！人が倒れたんだぞ！）

明久（どうする？姫路さんには心配かけたくないのに・・・）

秀吉（仕方が無いのう・・・）

圭太（やめるそんなことしたら命が・・・）

そんなこんなで雄二イケニエたちが帰ってきた。

雄二「おっ！うまそうだな」

雄二がひとつ弁当（兵器）をてにもつ

俺は止めたりしない！

昨日の仕返しだ！！

ボタン（雄二が召されて倒れる音）

カランカラン（ジュースが倒れる音）

雄二！お前のことは忘れない！・・・多分

おっ！今度は雄二からのアイコンタクト通信を受信した。

雄二（毒を盛ったな）

失礼な奴だ

圭太（毒じゃない、これが姫路の実力だ）

明久（毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ）

圭太（明久この弁当は俺が全部逝く）

明久（そんなことしちやダメだよ）

秀吉（そうじゃ！なぜそんなことをして・・・）

クソツ時間が無い！

圭太「姫路！あれは何だ？」

よし！今ならいける

意識が・・・ヤバイ

圭太（明久あとのはたのんだ）

姫路「あとデザートもあるんですよ！」

圭太（・・・明久・・・頼む）

明久「姫路さんあれはなんだ？」

姫路「引つかかりやすいね・・・感心している場合ではない
逝くぞ！荒井 圭太！今逝く！」

姫路の料理の中でデザートを頼んではいけない

圭太「ちよつと明久・・・保健室逝ってくる・・・」

明久「行ってらっしゃい（ありがとう）」

秀吉「行ってくるがよい（すまぬ）」

圭太「じゃあな（いいんだ）」

そして圭太は階段を下る前に意識が落ちた・・・

第六話 Bクラス戦（前書き）

問題 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

荒井圭太の答え

『W A K A R I M A S E N』

教師のコメント

そうですね・・・補習室に来てください。

第六話 Bクラス戦

現在Fクラス

ハツ・・・ココどこ？

そしてこの川は何なのさ？

あああそこに！

圭太「ああ、あそこにおじいちゃんが手招きしてる！」
どこかに船渡しはないのか！

あの川を渡らなければ！

圭太「・・・ハツ！」

秀吉「大丈夫かのう？」

秀吉がそういつて緑茶を渡してくる。

つというより緑茶で姫路の料理は殺菌できるの？

まあもらっておこう

圭太は緑茶を飲みながらFクラスを見渡す
ん？あれ？明久が居ない？

そうだ雄二に聞こう！

圭太「ねえ雄二！」

雄二「なんだ？」

圭太「明久は？」

雄二「Bクラスのイケニエになった・・・」

雄二が合掌してるし・・・

明久が悪いんだし助けに行かなくていいかな？
臨死体験した後だし・・・大丈夫だよな？

圭太はそのまま寝ることに専念した。

明久「・・・言い訳を聞こうか」

やっぱりボロボロだな・・・みつともない

雄二・圭太「予想通りだ」

明久「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

雄二「落ち着け」

ボスツ

ぬわ！つとそこは・・・鳩尾じゃね？

あゝあ伸びてんじゃねえか？

明久の死体？が転がっている・・・

秀吉「わしは帰るとするかのう？・・・圭太？」

圭太「久しぶりに一緒に帰るか！秀吉？」

秀吉「そうじゃのう」

圭太「じゃあゝそういうことで先に帰るよ雄二！」

雄二「あんまり寝てるんじゃないぞ！あと勉強もー」

圭太「わかつてるって！」

俺と秀吉はFクラスを出て行った（というより帰った）

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が皆の方を向いている。

やっと全教科のテスト受けれた。

雄二「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

F「おおーっ！」

あれだけテスト出来ないのに何でモチベーション下がらないんだろ
う。

雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、
開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

F「おおーっ」

雄二「そこで、前線部隊は姫路と秀吉に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい！」

姫路「が、頑張ります」

秀吉「うむ。任せるのじゃ」

F「うおおーっ！」

凄いな。こいつら

キーンコーンカーンコーン

雄二「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

F「サー、イエッサー」

無駄に勢いが有るな

F「いたぞ、Bクラスだ」

F「高橋先生を連れてくるぞ！」

F「生かして帰すな　っ！」

無駄に強気だし・・・大丈夫か？

Bクラス　野中長男　VS　Fクラス　近藤吉宗

総合　　1943点

764点

おおー！本当に大丈夫か？

しゃあない

圭太「近藤！そこをどけ！俺がもてあそんでやる！」

B「あいつは・・・Dクラス戦の前線を一人で保ったやつだ！」

B「けどあいつは学力が低いから一気にかかれ！」

ッ！！まあ言うだけ言っつけ！

潰してやる！！

圭太「Fクラスだからつてなめんなよぉ〜」

荒井圭太！殺ります！試獣召喚！^{サモン}！

Bクラス 野中長男 VS Fクラス 荒井圭太

総合 1943点 7480点

B・F「なんだつてええ〜〜！」

B「あいつはバカじゃないのか？」

B「あんなのに勝てる気がしない・・・」

Fクラスだからつてなめるからいけないんだよ！

そのまま勢いでBクラスの召喚獣を切り捨てる

西村「戦死者は補習〜」

がんばるんだ！西村先生〜〜！ん？

B「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

姫路も殺つたみたいだな

B「なつ！そんな馬鹿な！？」

B「姫路瑞希、噂以上の相手だ！」

B「それに一人化け物みたいのがあるぞ！」

B「何！姫路瑞希よりも危険だというのか？」

B「ああ。姫路瑞希を軽く凌駕している」

うれしいですねえ〜

褒めてくれます！

えっ！褒めてないの？

まあ〜いまは戦争に集中だ〜

けど・・・

圭太「そろそろ根本が何かしてくるころだろうからな・・・明久！」

明久「？」

圭太「一旦退却だ！」

明久「じゃあ、姫路さんも一緒に」

圭太「そうだな。おい！姫路」

姫路「ああ、はい。何ですか？」

圭太「一旦教室に戻るぞ」

姫路「分かりました。それでは皆さん頑張ってください！」

F「やったるでえーっ！」

F「姫路さんサイコーっ！」

やっぱりバカばかりだ・・・

圭太「根本って想像してたよりもっと器が小さい男だったんだな」

姫路「酷いですね」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

明久「卑怯、だね」

教室に戻ったら穴だらけの卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムが俺達を迎えてくれた

許すマジ根本！！

圭太「雄二。どうしてこうなったんだ？姫路を下げるんだから協定何ぞ受ける必要ないだろう？」

俺の一番の疑問を雄二に質問する。

雄二「嫌、そうでもないぞ。相手が持ち込んできたから話を聞くために教室を出たんだが、どうやらその間にやられたらしい」

たったそれだけで行ったのか・・・

明久「雄二！どういうことさ？」

おっ！よくいいところに気がついたな

雄二「簡単な事だ。Fクラスの主力は姫路と圭太だからな。それと姫路の体力面に問題があるからな。いくら後方や護衛に回してキツイもんはキツイからな」

圭太「成程。そういう理由なら仕方ないな」

そうだったのか・・・

秀吉「それでは儂らは前線に戻るぞ」

圭太「雄二！あとは頼んだよ」

雄二「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

さあて

根本次は何をしてくれるんだ？

俺は秀吉たちと一緒に戦線に戻った

第六話 Bクラス戦（後書き）

戦闘シーンがうまくかけません（泣）

第七話 Bクラス戦

現在廊下にて

圭太「じゃあ秀吉よろしく」

秀吉「任せるのじゃ」

秀吉は殺る気満々で圭太たちと別れる

さて明久たちの軍隊の様子でも見ますか！

明久「ああ！圭太！」

圭太「どつたの？明久」

明久「Bクラスの連中が卑怯な手を使ってるんだ！」

その場所を見ると

島田がBクラスにつかまっていた・・・

圭太「試獣^{サモン}召喚」

Fクラス 荒井圭太 VS Bクラス2人

英語W 723点

平均23点

どこまで弱ってたんだ、Bクラス・・・

明久「ダメだよ！圭太！あれは偽者だよ！」

バカか・・・明久・・・ああバカだったな明久は

B「こいつがどうなってもいいのか」

B「そ、そうどうぞ」

圭太「関係ない」

バンバンっ（M92Fで打ち落とす音）

西村「戦死者は補習」

圭太「お疲れ様です。BIG BOSS！」

西村先生に敬礼！（ビシッ）

明久「みんな！離れるんだ！そいつは偽者だ！」

まだ勘違いしてるのか・・・

どっか行こう

明久「ああー島田さん！その右腕だけはまがらなっ・・・」

聞いてないことにしておこう

教室に付いたら何か死体？になつた明久がいた

圭太「コイツに何が有つたんだ？」

雄二「ああ、どうも島田を怒らせたらしいんだ」

そうか、やっぱりか・・・

圭太「雄二、戦況は？」

雄二「ん？ああ、これだ。こちらの被害も少なくないが、一応計画通り教室前に攻め込めたぞ」

言いながら雄二はこちらの被害が書かれたメモを渡してくる。

被害は予想内だけど

圭太「戦死者多くない？」

雄二「嫌。それでも俺の予想よりは少ないから大丈夫だろう」

そういうものなのか？

康太「・・・（トントン）」

雄二「お、康太。どうした」

ビククリしたあくいきなり出てこないでよ

雄二「何、Cクラスが怪しい？」

康太「……………」(コクリ)「

雄二「漁夫の利って訳か。下らん奴等だ」

ん？Cクラス代表って確か

圭太「雄二。今Cクラスに行くのは不味いと思う」

雄二「圭太？どう言うことだ？」

圭太「Cクラス代表は確か小山だったよね雄二？」

雄二「それがどうしたんだ」

圭太「あいつは根本と付き合っているらしい」

雄二「本当か。それは？」

みんな？

あの小物がつきあってるからって殺気立つな！

雄二「まあ、どっちにしても行かないとな。このままじゃ面倒なことになる」

明久「そうだね。早く行かないとCクラス代表が帰るかもしれないし」

圭太「んじゃあ、行くか」

秀吉「うむ。行くのじゃ」

雄二「いやっ！秀吉にはここにいてほしい」

秀吉「何故じゃ？」

雄二「秀吉の顔を見られると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんな

あと圭太はこの協定に失敗したら血路を広くため外で待機してくれ」

圭太「は〜い」

こうして協定を結びにFクラスを出ていった。

Cクラスが騒がしいな、失敗デモシタノカナ雄二？

そう思っていると雄二たちが出てきた

やっとな殺れる！

ん？明久じゃねえか？何そこで壁作ってんの？

圭太「明久！援軍だ！」

明久「圭太！援軍はいらない島田さんといっしょにここでBクラスを潰す！」

圭太「分かった！Fクラスで待ってるよ！」

明久たちと離れる・・・って俺がココに来た意味は？

教室にて

圭太「雄二！Cクラスはどうする？」

雄二「ああそのことなら明日に実行するから楽しみにしてる」

楽しみにでもしますか！

第八話 Bクラス戦（前書き）

これでBクラス戦終わらせませす！

第八話 Bクラス戦

現在Fクラスにて

圭太「じゃあ雄二！昨日の作戦を！」

雄二「分かっている・・・まず秀吉！」

秀吉「なんじゃ？」

雄二「秀吉にはこれを着てもらおう」

雄二が出したものは女子の制服だった

というより

なぜ

2着？

秀吉「あと一人は誰が着るのじゃ？」

秀吉が俺が疑問に思っていたことを先に言ってくれた。

雄二・・・さつきから目線が気持ち悪いほど来てるんだけど・・・

雄二「あと一人は圭太に着て貰う」

圭太「何で!？」

明久「うーん、じゃあこれをかぶって！」

明久がカツラをとりだす

どっからだしたんだ？

圭太はシブシブ、カツラをかぶる

F『美少女キターーーー』

F『男の娘キターーーー』

F『付き合ってください・・・(バキッ)・・・』

最後のやつは気にさわる！

こうして俺たちは女装した。

F 『おお~~~~~』

変な目線で見られた・・・

このやろう雄二め・・・借りを返してやる

雄二「その格好で挑発して来い」

秀吉「では行つて来るのじゃ！」

圭太「・・・・・・・・・・・・・・・・」

秀吉に引つ張られて

Cクラスへ出発した

現在Cクラス

秀吉 『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

あれ？優子ってこんな感じ？

小山 『な、何よアンタ達』

秀吉 『話かけないで！豚臭いわ！』

小山 『Aクラスの木下と誰かしら？可愛いわね・・・じゃなくてちよつと点数良いからって良い気になってるんじゃないわよ！何の用よ？』

ちよつと待つんだ小山さん俺のことをそんな風に仕立て上げないで！

秀吉『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

Fクラスは豚小屋と言っているのですか？

小山『なっ！言つに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

ほら来たあゝ

秀吉『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達全員を始末してあげようと思うの』

特別なんだー（棒読み）

秀吉『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私たちが薄汚い貴方達を始末してあげるから！』

そう言い残しCクラスを出る

俺って空気の存在じゃなかった？

秀吉『これでよかったかのう？』

すつきりしてるよ秀吉の顔！

雄二『すばらしい仕事だった』

小山『Fクラスなんて相手してられないわ！全力でAクラスを潰していくわよ！』

C『おおーっ！』

あっ！ヤバイこのことが知れたら秀吉の命が・・・

けど試召戦争まで時間が無いし急ぐか・・・

早足でFクラスへと向かった

秀吉「ドアと壁をうまく使うのじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ

圭太「お前ら！勝負は単教科で挑め！常に2〜3人で囲んで潰してしまえ！後、補給は念入りに行え！」

F「おおーっ！」

F「左側出入り口、押し戻されています！」

F「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

流石に負けそうだなあ。

圭太「俺が行く！試^{サモン}獣召喚！」

Fクラス 荒井圭太 VS Bクラス 12人

古典 582点 合計 1467点

約三倍以上か

やばいかも

圭太がBクラスの召喚獣が来る前に身構える
そして一体が圭太に攻撃を仕掛ける

つが、あまりにも直線的攻撃だったためM92Fの銃弾で剣の軌道をそらし日本刀で切る！

ザシュっとな

あと11人か・・・

圭太『さつさとかかってこいや〜！』

ん？明久？どうした？

戦線離脱か？まあいい

今はこの勝負に集中するか・・・

圭太は5分でBクラスを蹴散らした

メールが！

フム・・・分かったよ雄二！この作戦だな！

ドンドンツと壁が鳴り響く

雄二と小物が何か話しているが戦闘に集中していて聞こえない

ドンツ

雄二「圭太！一旦引くぞ！」

圭太『へ〜い』

ドガンツ（Dクラスの壁とBクラスの壁が開通する音）

壊した穴から明久や島田が飛び出してくる。
随分と豪快な作戦だな

というより明久

フィードバック大丈夫？

島田「遠藤先生！Fクラス島田が」

B「Bクラス山本が受けます！試験召喚^{サモン}」

まだ、生きてたのか近衛部隊

てか、小物ビビり過ぎじゃね？

圭太「残りの相手は俺がしてやるから早く根本倒せよお前ら」

雄二の方を向くと頷いたから殺つていいってことか

明久「分かつてるよ圭太！」

明久たちが近衛部隊を引き付けている間に

ダンッ！ダンッ！

康太がBクラスの窓から出てきた！

康太「……………Fクラス、土屋康太」

全員戦闘中で根本の助けに行けないねえ。

小物「き、キサマ……………！」

康太「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」
小物「ムツツリイニーツ！」

康太を見ただけでその名が浮かぶ彼はダメな気しかし無いけど・・・

康太「

試験^{サモン}召喚」

Fクラス	土屋康太	VS	Bクラス	根本恭二
保健体育	441点		203点	

流石は康太だ。

保健体育だけならAクラスより高いからな。

こうして

Bクラス戦は終結した！

第八話 Bクラス戦（後書き）

圭太「まさか女装させられるとは・・・OTL」

作者「仕方が無いんだよ・・・中性的な顔だから」

圭太「しかも変な目線で見られて・・・小山さんから可愛いといわれ・・・」

みんな嫌いだよ（泣）」

作者「あゝあ帰っちゃったよゝあとこれからも

『俺と幼馴染とバカたちと！』をよろしくお願いします」

第九話 Bクラス 対戦後（前書き）

第九話 Bクラス 対戦後

現在Bクラス

圭太「明久、随分豪快な作戦を実行したな」

秀吉「明久、随分と思いついた行動に出たのう」

終戦後明久の近くに行つて話かける。

明久「うう……。痛いよう、痛いよう……」

何て言うか

圭太「フィードバックがあるのに……。自業自得だ。明久」

秀吉「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

秀吉？明久にバカつて直に言いそうになつただらう？

明久「で、でしょ？もつと褒めていいと思うよ」

秀吉「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

圭太「後先考えず自分の不利になることばかりする、何とも明久^{バカ}らしい作戦だ」

明久「遠まわしに馬鹿つて言ってるでしょ!!」

そうだけど？

雄二「ま、それが明久の強みだからな」

だよね〜

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表」

雄二が根本の方に向き直る

小物、今までの強気が嘘のようだ。

雄二「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言をにザワつく一同

まあクラスが変わらなくて済むからな

雄二「お前ら、俺達の目的はAクラスだ。ここは通過点に過ぎない」

雄二が言うのと皆納得したように頷いた。

小物「条件はなんだ」

小物が力なく問う。

雄二「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

小物「俺、だと？」

雄二「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

圭太「っでその条件は・・・これを着てもらおう！」

俺は女子の制服（Cクラスに行くときに手に入った）を取り出す
どうい風な女子の制服を処理するか迷ってたんだよね〜

圭太「そして、そのままの格好でAクラスに試召戦争の準備ができてますっていつて来たら免除つと言うことで」

B『Bクラス全員で実行しよう!』

B『それでBクラスが守られるのなら』

人望無いね〜小物?

つとおもっている和小物がBクラスにやられている

それより女子の制服って複雑だなあ〜

着せ方が分からない・・・

B『私たちがやってあげようか?』

ありがたい!

そう思つて振り返ると姫路にやられた岩下さんと菊入さんだった

圭太「ありがとう〜岩下さんに菊入さん! (ニコッ)」

女子(姫路・島田を除く)『……………/』

どつたの女子の皆さん?

顔赤いですよ・・・?

秀吉もどうしたんだ? 熱か?

圭太「まあ〜とりあえずよろしく」

小物の女装が出来上がるまでFクラスで寝ていた

PS 小物の女装まじハンパねえ

ところ変わってFクラス

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

雄二が礼を言ってる。

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

明久に同意

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

ああ、やっぱりこいつは格好良いな。

雄二「残るAクラス戦は一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

F「『どういうことだ?』」

F「誰と誰が一騎打ちするんだ?」

F「それで本当に勝てるのか?」

圭太「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ」

まあ、当然だな。

代表同士の一騎打ちで決着はすぐつくし交渉も簡単に終わるからな
問題は勝てるかどうかということだ。

明久も同じことを思ったらしい

明久「馬鹿な雄二が勝てるわけなあつ!？」

雄二「次は耳だ」

圭太「そこは目だろ!まったく何を考えているんだ雄二!」

明久「怖いよ!それまた怖いよ!」

圭太「で、雄二の事だ。勝てる勝負をするんだらう?しかし、翔子に苦手科目何て有ったつけ?」

雄二「ああ。日本史でレベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、純粋な点数勝負だ」

翔子「日本史苦手だったかな。」

なんかで気をそらすのかなあ

明久「でも、それじゃあブランクのある雄二には厳しくない?」

秀吉「確かに明久の言うとおりじゃ」

圭太「どうせ雄二の事だ。何か秘策でも有るんだらう?」

雄二「圭太の言う通りだ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると俺が知っているからだ」

ある問題?翔子にその問題は無いだらう?

雄二「その問題は 『大化の改新』」

圭太「大化の改新?誰が何をしたのか説明しろ、とか?そんなの小学生レベルの問題で出てくるか見たいな感じか?」

雄二「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

圭太「単純というと 何年に起きた、とかか?」

雄二「ビンゴだ圭太。その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

確か645年だったな。

翔子がそんな問題答えられないとはとても思わんが

雄二「ちなみに、大化の改新が起きたのは645年だ、明久」

今、思いっきり目逸らしやがった。

何年で覚えているんだ？

雄二「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばだ」

姫路「あの、坂本君に荒井君」

雄二「ん、何だ姫路？」

圭太「ん、俺もか？姫路？」

姫路「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

雄二・圭太「ああ。アイツとは幼なじみだ」

明久「総員、狙ええっ！」

雄二「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

圭太「ちよつと待て、関係ないだろう！？」

こいつらは、何でこんな時だけスペックが高いんだ？

明久「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマ達を殺す！」

圭太「そんなの関係ねえじゃねえか！」

くそ、無駄な団結力を見せやがって

明久「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」
須川「了解です隊長」

本当に無駄なスペックだ。

姫路「あの、吉井君」

明久「ん？なに、姫路さん」

姫路「吉井君は霧島さんが好み何ですか？」

明久「そりゃ、まあ。美人だし」

バカだな明久

明久「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと、美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険物を投げようとしているの？」

自業自得だ。

秀吉「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

俺の命が助かった。

明久「む。秀吉は雄二と圭太が憎くないの？」

俺たちは関係ないだろう

秀吉「良くかんがえるのじゃ、相手はあの霧島翔子じゃぞ？それに男である雄二と圭太に興味があるとは思えんじやろうが」

うんうん

秀吉「むしろ、興味があるとすれば……………」

目線が姫路に集まっている…………

翔子、お前凄い誤解を受けているぞ。ほら、姫路が困ってるじゃないか。

雄二「とにかく、俺と圭太と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

まあ俺もそうだが・・・

雄二「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は

」

F「システムデスクだ！」

そしてAクラスへと向かった

第十話 Aクラス戦 戦争開始！

優子「一騎討ち？」

宣戦布告中です。

雄二「そうだ。FクラスはAクラスに代表同士の一騎討ちを申し込む。」

優子「何を企んでいるのかしら？」

雄二「Fクラスの勝利それ以外に目的はない。」

優子「面倒な試召戦争を手っ取り早く終わらせるのはいいけれど、わざわざリスクを侵す必要はないかな。」

雄二「懸命な判断だ。そういえば今日のCクラス戦はどうだった？」

優子「時間をとられただけよ。」

雄二「Bクラスとやり合う気は？」

優子「Bクラスって、昨日来てたあの女装野郎？」

雄二「すごいだろ。うちのクラスの奴がやったんだ。さて、まだ、宣戦布告はされてないようだが、この先はどうなるかな？」

優子「BクラスはFクラスに負けたから、宣戦布告は出来ないのじゃない。」

雄二「ところがどっこい、和平交渉って、ことになっているから、出来るんだよ。」

圭太「Dクラスとも、和平交渉つということとで終わらせているぞ」
優子「脅されてる訳ね。」

そうです。

雄二「そんな、ただのお願いだよ。」

優子「Fクラスのくせして。」

圭太「それなら5回戦勝負でお願いします。」

現在土下座という姿勢です。

ガチでお願いします

優子「うーん・・・それならいい(翔子)」……………ちょっと待って優子。」だ、代表!」

霧島「……………科目選択権は2つは私達がもらう。あと負けたほうはなんでも言うことをひとつ聞くこと」

雄二「わかった!交渉成立だ」

そうしてAクラスを後に・・・?

優子「圭太!ちょっと良いかしら?」

圭太「よろしくありません・・・あっ!ちょっと待って、すみませんでしたから折檻だけはどうかお慈悲を!」

優子「それぐらいどうでも良いわ・・・あの交渉ってあなたにも有効なのよね?」

圭太「内容によるけどたぶん良いんじゃない?」

優子「そう?ならいいわ、もどっていいよ」

拷問?から帰省した圭太の姿があった。

高橋「では、両名共準備は良いですか。」

雄二「ああ。」

霧島「……………問題ない。」

高橋「それでは、一人目の方どうぞ。」

佐藤「私から行きます。科目は物理でお願いします」

相手は佐藤さん。この5対5の勝負に出てくるということは相当な実力者だろう。

雄二「よし。頼んだぞ、明久」

明久「え！？ 僕！？」

圭太「明久イケニエがんばれ」

まあ他の誰かを出すよりかは観察処分者で召喚獣の操作に慣れている明久が適任だろう。

生け贄としても……………

雄二「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

雄二、お前はそこまで明久のことを信頼しているんだね。負けるということに

明久「ふう……………やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

本気？ まさか俺が知らない明久バカの真の力があるというのか！？

雄二「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、

お前の本気を見せてやれ」

F『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

F『いや、そんな話は聞いたことはないが』

F『いつものジョークだろ？』

佐藤「吉井君、でしたか？ あなた、まさか……………」

だよね〜！明久^{バカ}が何をしでかすか・・・お兄さん心配だなあ

明久「あれ、気づいた？」ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

明久はそう言い終わると袖をまくり、手首を振る。

佐藤「それじゃ、あなたは・・・！！」

明久「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕・・・」

大きく息を吸い・・・

明久「・・・左利きなんだ」

言い放った。明久の観測でもしてみようかな〜

どうやって生きているのかとか〜常識は持ち合わせているのかとか！

Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久

物理 389点 VS 62点

島田「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

明久「み、美波！ フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

雄二「よし。勝負はここからだ」

明久「ちよつと待った雄二！ アンタ僕を全然信頼してなかったでしょう！」

雄二「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

圭太「信頼があゝ材料は何かな」

悪ノリしてみる

高橋「では、二人目の方どうぞ」

康太「・・・・・・・・・・・・・・・・（スック）」

康太が立ち上がる。

工藤「じゃ、ボクが行こうかな」

工藤か・・・・・・・・情報はあんまり知らないな

工藤「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

高橋「教科は何にしますか？」

康太「・・・・・・・・・・・・・・・・保健体育」

康太が保健体育か・・・・・・・・心配無用か！

工藤「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

やっぱり康太も名が高いな

工藤「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・・・・・・キミ

とは違って、実技で、ね」

実技って・・・・・・・・スポーツだよね！

工藤「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えようか？ もちろん実技で」

明久、お前に矛先が向いてるぞ

明久「フツ。望むところ。」

島田「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」

姫路「そうです! 永遠に必要ありません!」

スポーツっつてすぐに機会が訪れると思うけど・・・?

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雄二「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しい顔をしているんだが」

工藤「それじゃあ、その荒井君よかつたらどう?」

優子「圭太、事と言葉によって・・・」

秀吉「どうなるかわかるかのう?」

優子・秀吉「圭太!」

優子と秀吉が怖いです。

だれか! 誰か! 支援救済を要請します!

高橋「・・・・・・・・コホンッそろそろ始めてください。」

ありがとうございます! 助かったよ!

「はい。試獣^{サモン}召喚」

「・・・・・・・・・・・・・・・・試獣^{サモン}召喚」

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太

保健体育 446点 VS 576点

フンツ！どうだ工藤！康太の実力を・・・理論派を！

工藤「っ！？ ならこれでどうだ！」

工藤がスカートを捲りあけてスパッツが見える

康太「……………（ブシャアアアアアアアアア）」

圭太「康太アアアアアアア！」

やばいこの量は……………尋常じゃない！

圭太「雄二！これじゃあ康太は使えない！」

雄二「ああ……………そうだな……………高橋先生こちらは棄権で」

圭太「康太！大丈夫か？今すぐ保健室行くぞ！」

そうやって康太を保健室に連れて行く

いきなり0勝2敗か…………

Aクラス戦は続きます。

第十話 Aクラス戦 戦争開始！（後書き）

ここでオリキャラを出したいと思います！

多分・・・

第十一話 Aクラス戦

康太を保健室に連行して圭太はAクラスへと向かっていた。

ん？秀吉が倒れてるけど……

圭太は、恐る恐るAクラスを覗いた

犯人は優子か……

じゃあまず、やることは……

圭太「すみません遅れました」

雄二「圭太！お前のせいで秀吉が犠牲にな」

圭太「つで相手は？」

雄二「人の話を最後まで聞け！……まあいい……相手は学年次席の」

えっ？学年次席って久保君だよな？その相手って姫路じゃないの？

雄二「お前の

妹だ！」

圭太「Why? MY SISTER?」

荒井 椎？

俺の妹だと！ちよつと待つんだ！俺の妹だと！

両親が海外で監禁してたはず！
それが来ているだと・・・..
ちよつと待て！こつちに来ているならメールが来ているはず！

圭太は携帯を取り出す。

.....

そうか〜そういうことだったのか〜（棒読み）

両親からメールが来ていただなんて・・・知らなかった。それも

一週間前にきていただなんて

雄二「圭太！ボサツとしてないでさっさと来い！」

圭太「へ〜い」

椎「あつ！圭太ちゃん！このまえ家に行ったけど、家がないんだけど？」

圭太「引越したからな・・・優子たちの近所に・・・」

そう、優子たちは引越した先で知り合ったそのときに椎は居ない

椎「あつそうなの？優子？」

優子「・・・うん。」

優子？どうした？暗いぞ？

圭太「まあいい、やるぞ！椎！サモン試獣召喚」

椎「サモン試獣召喚」

Fクラス 荒井圭太 VS Aクラス 荒井椎

総合 7830点 5890点

A・F『学年主席を抜いただと!?!』

圭太『椎!お前!その学力はどうしたんだ?』

椎『ここに圭太ちゃんがいるって教えてくれたからね』

圭太『おい!雄二!なにが、学年次席だ!主席レベルじゃねえか』

雄二『お前が人のことを言うか?』

みんなビツクリしてるね。俺も椎の勉強があれほど凄いと知らない
かった・・・

さあ始めようか

圭太は椎の召喚獣に向けて銃弾を放つ

つが打ち払われてしまう。

圭太『操作技術が高いだど!?!』

椎の召喚獣は一向に攻撃してこない・・・なぜに
それにたいして椎がこっちに近づいている
そして・・・

椎『圭太ちゃん!捕まえた』

そういつて俺が捕まる・・・召喚者が召喚獣に危害をくわえていい
の?

圭太「高橋先生！この状況どう思いますか？」

高橋「荒井椎さんの行為は違反に入りますのでこの勝負はFクラスの勝ちとします。」

あつぶなかつた〜

あのままあの点数で切られていたら一溜まりもない
というかシヨツク死すると思う・・・たぶん

圭太「すまない椎！これは戦争だからな」

椎「別にいいけど、家に帰ったらいろいろして貰うから」

そのいろいろって言う言葉が引つかかるな〜

高橋「これで2対2です。最後の一人、どうぞ」

翔子「・・・はい」

雄二「俺の出番だな」

二人が前に出る

高橋「教科はどうしますか？」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限
ありだ！」

雄二の言葉でAクラスにざわめきが生まれた。

A「上限ありだつて？」

A「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか」

A「注意力と集中力の勝負になるぞ・・・」

高橋「わかりました。そうなる」と問題を用意しなければいけません

ね。少しこのまま待っていてください」

先生が出て行った後、みんなが雄二に駆け寄る。

明久「雄二、後は任せたよ」

雄二「ああ。任された」

康太「……………(ビツ)」

雄二「お前の力には随分助けられた。感謝している」

康太「……………(フツ)」

姫路「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

雄二「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

姫路「はいっ」

圭太「今しか証明ができないぞ……………しくじるなよ雄二」

雄二「ああわかつている」

圭太「行ってらっしゃい」

雄二「おう、行ってくる」

それぞれが言いたいことを言った。

視聴覚室……………

高橋『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

高橋『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

翔子『……………はい』

雄二『わかっているわ』

高橋『では、始めてください』

黙々と問題を解いていく二人。
果たしてあの問題はあるのか？

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

- () 年 平城京に遷都
- () 年 平安京に遷都
- () 年 鎌倉幕府設立
- () 年 大化の改新

あ………！ あった！

明久「秀吉、これで………」

秀吉「うむ、ワシらの卓袱台が」

秀吉がいつのまに！？

F『システムデスクに！』

明久「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

F『うおおおおっ！』

明久の声と共に皆が叫ぶ。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第十一話 Aクラス戦（後書き）

圭太のもとに妹さんが帰省しました。
このあとはどうなることやら。

第十二話 Aクラス戦 終結

「三対二でAクラスの勝利です」

無情にも響き渡る高橋先生の声。

翔子「……………雄二、私の勝ち」

雄二「……………殺せ」

明久「良い覚悟だ、殺してやる！ 歯を食いしばれ！」

姫路「吉井君、落ち着いてください！」

姫路さんが明久を止めるために後ろから抱きつく。

明久、胸当たってるのに気づいて無いのかな？

明久「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと——」

雄二「いかにも俺の実力だ」

明久「この阿呆があーっ！」

ああ雄二はバカだそして明久も

島田「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

明久「それについて否定はしない！」

姫路「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

明久「くっ！ なぜ止めるんだ姫路さんに美波！ この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

姫路「それって体罰じゃなくて処刑です！」

翔子「……………でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」

雄二「言い訳はしねえ」

翔子「……………ところで、約束」

さてさて、雄二、こっからが地獄だ

康太「……………！！（カチャカチャカチャ）！」

流石は康太早くも撮影の準備をしている。

雄二「わかっている。何でも言え」

翔子「……………それじゃーー」

翔子「……………雄二、私と付き合って」

雄二「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

翔子「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

雄二「その話は何度も断つただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

翔子「……………私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」

昔から一途だからね

雄二「拒否権は？」

翔子「……無い。約束だから。今からデートに行く」

雄二「ぐあつ！ 放せ！ やっぱこの約束はなかったことにー」

がんばれ〜翔子

西村「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

この野太い声、まさか！

明久「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

西村「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っとな」

マジですか？

西村「おめでとつ。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるようだ。

これから一年、死にものぐるいで勉強できるぞ」

F『なにいつ！？』

なにい！？ (ガシツ) ってぬわあ〜

圭太が引つ張られた先には優子の姿が……

優子「さあ圭太？ 約束があるんだけど？」

やけにテンションが高いですね

優子「それじゃあ〜二人つきりて買い物でも

」

秀吉「待つのはじや姉上！」

椎「そうよ！優子！明日は圭太ちゃんと映画でも見に行こうとしてたのに！」

っはい？俺は圭太ちゃんではありませんよ？
って気づくとこのそこじゃないの？

圭太「なら4人で行くツというのは？」

秀吉「それがいいのう」

椎「仕方が無いわね」

椎・・・仕方が無いのですか・・・

優子「でも、約束が・・・まあいいわ、それで」

圭太「なら決定」

こうして家へと帰った

帰路にて

なんで三人は買い物に行きたいのかな？

椎なら分かる気も・・・知れないが

なぜに？

ここには圭太バカという鈍感が居た・・・

第十二話 Aクラス戦 終結（後書き）

やあっと終わりました〜

あとは清涼祭に強化合宿などですね〜

オリ話はどうしたら良いのかわかりません。
誰か助けて〜

じゃなくて、感想などよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958x/>

俺と幼馴染とバカたちと！

2011年10月28日14時01分発行